北九州市立文学館紀要
第２号

【資料紹介】
杉田久女未刊の「句集花衣」の構想について …… 中西由紀子　3

児童文学の雑誌「小さい旗」解題・総目次（2）
第51号〜第82号 …… 小野　恵　12

寄贈資料　2017（平成29）年度 …… 45

2019（平成31）年3月
北九州市立文学館

北九州市立文学館紀要　第2号
2019（平成31）年3月

北九州市立文学館紀要
第２号

2019（平成31）年３月

北九州市立文学館

【資料紹介】杉田久女未刊の「句集花衣」の構想について

中西　由紀子

1　はじめに

杉田久女（一八九〇―一九四六）が、一九三九（昭和14）年一一月に記した自筆資料を紹介する。自らが主宰した俳句雑誌「花衣」を再編集し、句集として刊行するプランが記されたものである。

本資料はすでに、かごしま近代文学館図録「杉田久女の俳句歳時記」（二〇〇八・一〇）、北九州市立文学館図録「花衣　俳人杉田久女」（二〇一一・一一）に写真の掲載があるが、詳細な検討はなされていなかった。俳誌「花衣」への自己評価が記され、また、俳句作家としての在り方に関わる資料なので、あらためて取り上げる。

以下、本資料の位置づけのため、久女が念願した句集出版の経緯をたどり、本資料全文を掲載する。なお、引用を含め、漢字は新字体に改めた。傍線は引用者による。

2　叶わなかった句集の出版

一九三二年三月、杉田久女が創刊した俳句雑誌「花衣」は、わずか半年、五号をもって廃刊した。久女はこののち、俳誌の主宰者という立場を脱し、句集を刊行して一人の俳句作家となることを目指す。

例えば、この年、若い句友・神崎縷々へ宛てた書簡（一九三二年一〇月三一日付　北九州市立文学館蔵）に見られる「雑誌再刊の希望は全然放棄いたしましたが何らか他の方法で甦生したいなどと思わぬ事もありませぬ」[1]という言及や、一九三三年三月二〇日付の日記（かごしま近代文学館蔵）に記された「自分は此運命をとほしてどうか全俳壇に貢けんしたい。ざつしは出さないから他のてきぎな方法もて」[2]という心境の「他の方法」とは、句集の刊行と理解されている。

後年、池上不二子や山口青邨などの回顧談[3]が発表

され、師高浜虚子の序文を掲げた句集刊行を切望する久女の姿が明らかになった。当時、一部の俳人の間では有名なエピソードだったのだろう。しかし、句集をめぐる久女の奔走と挫折を端的に世へ知らせたのは、序文を与えない高浜虚子自身の記述だった。

虚子は久女の没後、自身へ寄せられた久女の手紙を素材に「国子の手紙」(「文体」一九四八・一二)という創作を発表する。作中、明らかに久女を連想させる国子が書いた手紙には次のように記されている。

> 句集〝月光〟が万一出版の運びになりますなら、私は序文をいたゞくか、序文は頂けずとも、せめて題目〝月光〟といふ字だけは御染筆願ひたいと思ひます。私の月光を浴びつゝ育つてゆく心持を、自序の中に認めて、御師たる先生へ捧げる小さい句集を作りたく存じ上げます。

日を置かず前便を取り消したり、周りの女性俳人を嫉妬したり、挙句、「俳句の上では「日本一」を自称する国子は、先生に「をかしいな」と思われ、書き連ねた「手紙を机の抽出しに投げこ」まれるようになる。崇敬する先生に黙殺される国子は「句集も暫らく出版は見合せ」、「もう自分の句集などゝいふことは一切考へず」「句集出版も中止」を宣言するに至る。

実際には、久女が念願した句集は、長女石昌子の尽力で一九五二(昭和27)年に刊行される。久女の孤独な死から六年が過ぎていた。石の懇請を受けた虚子は選句の任を受け、序文で久女の作品に「清艶高華」の讃辞を贈ったが、やはり次のように記している。

> 生前一時其の句集を刊行し度いと言つて私に序文を書けといふ要請があつた。喜んでその需めに応ずべきであつたが、其の時分の久女さんの行動にやゝ不可解なものがあり、私はたやすくそれに応じなかつた。(4)

国子ならぬ久女もやはり黙殺されたのだ。

「国子の手紙」で「月光」とされた句集名については、増田連が早くに指摘している。

> まぼろしの句集となった本の題名は『磯菜』で、装幀(池上浩山人)も出版社(竜生閣)も決っていて、出版予告まで出たが、虚子の序文(または染筆)がもらえないため、久女の意志で、結局、とり止めになった――と、これは池上浩山人氏から直接聞いた話である。(5)

近年、坂本宮尾の精緻な調査により、この『磯菜』出版予告の詳細が明らかになった。正岡子規編纂『分類俳句全集』普及版(アルス、一九三五〜三六)の月報「現代俳句」創刊号(一九三五・五)、「俳壇展望」欄に言及があるという。そこには、杉田久女が『磯菜』という句集を徳富蘇峰と高浜虚子の序文を付して刊行する、という内容が掲載されていた(6)。

坂本は、すでにこの年(一九三五年)から翌年にかけ、久女が徳富蘇峰の助力を仰ぎ句集を出そうと試みたことを指摘していた(7)。この記事の発見からさらに推理を進め、その後久女を待ち受ける同人「削除」の処分へと至る道筋を次のように示している(8)。

与えるつもりのない「高浜虚子の序文」が既成事実のように語られたこと、文壇の大御所である徳富蘇峰を動員してまで句集の刊行にこだわることは、虚子を不快にさせるに十分だった。自らの洋行中(9)、蘇峰を通じて刊行の準備が着々と進められたことは、虚子の側からすれば、久女の句集を認めざるを得ない圧力をかけられたようで、その「逆鱗」に触れたというのである。

久女が「ホトトギス」の同人を「削除」されるのは、虚子の帰国から四カ月後のことである。

> 「句集もね、こんなになっては(戦争苛烈)出せる望みも無いから、仕方ないと思ふよ、だけどだがね、私がもし死んでからでも、機会があったら、お前は忘れないでゐて、きっと出(ママ)しておくれね、いゝね、忘れないでだよ、死んで後でもいゝから」(10)

一九四四年夏、久女と最後に会った時の言葉を石昌子は「遺言」と受け止めたという。久女は、最期まで句集刊行に望みをかけていた。

一方、俳人としての久女は一九三九年七月、「俳句研究」に発表した「プラタナスと苺」四二句を最後に沈黙することになる。翌八月から九月にかけ、久女は

過去の作品を集中的に整理し一一六枚の句稿にまとめた。「遺句稿」と呼んでいる資料（圓通寺蔵）で、没後に編集される『杉田久女句集』の土台になる。この句稿を石が清記し、虚子の選句を受けて句集が刊行された[11]。

坂本宮尾はこの句稿を俳人杉田久女の総括と位置づけ、この年、久女は「俳句作家として生きることに自ら終止符を打った」としている[12]。

3　本資料について

本資料は、この遺句稿の完成から二カ月後、一九三九（昭和14）年一一月一九日の日付を持つ。過去に刊行した主宰誌「花衣」を新たに編集、加筆し、「句集花衣」として出版することが記されている。

久女が丹精した俳誌「花衣」は「研究文選句共決して現今に於ても価値に相違のない」という自己評価、矜持に注目したい。これをもとにする「句集花衣」は「世のつねの句集と全然形式内容を異に」し、「句あり文あり、研究文あり」としているので、実質は句文集の形式だろう。

もちろん、久女にとって「花衣」は、自分が俳人としてもっとも充実して輝いた時の象徴であり、それを記念碑として残そうとしたことは想像に難くない。しかし、ここではさらに、久女が俳句人生の後半をかけて注力した女性俳句研究の仕事を形として残すことが企図されたと考える。

俳誌「花衣」には「女流俳句を味読す」（創刊号）、「桜花を詠める句（古今女流俳句の比較）」（2号）、「五月の花（古今の女流俳句対比）」（3号）、「女流俳句と時代相」（4号）などの「研究文」が掲載されている。その内容に久女は変わらぬ「価値」を見出した。

「国子の手紙」には、手紙一八に「句集出版も中止。何より先に女流俳句の仕事を完成します」とあり、久女が句集出版と同じく、女性俳句研究も自らの仕事として重視していたことがうかがわれる。

執筆時期や投函については不明だが、久女が虚子に宛てて書いた自筆資料に「万一先生の御手であの婦人俳句のしごとが世へ出ます日がありますなら……（後略）」と記されたものがある（北九州市立文学館蔵）。石昌子によれば、久女は熊本の俳人・有働木母寺と協力して「古今女流俳句の比較研究」に取組み、大部な

論文を作成していた。論考は「多分除名後」に虚子へ提出されたが、「この労作の原稿の行方は審らかでない」という[13]。その幾ばくかでも、ここに遺そうとしたのだろうか。

執筆時期に明らかなように、本資料は、遺句稿と合わせて捉えるべきと考える。遺句稿は久女が後世に残すことを願った俳句作品であり、「句集花衣」は俳人・杉田久女の研究者、編集者としての側面を伝えるものになるはずだった。「句集花衣」が、句集『磯菜』を補う構想だったともいえる。

「句集花衣」の内容については未詳である。もともと本資料で語られる構想のみだったのか、あるいは、中身もすでに整理されていたが遺失、破棄されたのか分からない。このため、本稿ではテキスト部分が空白の「構想」として扱っている。

資料の外形は和紙に墨書き。紙面真ん中の折跡と左右に開けられた小さな穴から、もとは二つ折りで帳面状に綴られていたと推測される。一枚に開いた形での寸法は、縦二一・五×横三一・七センチメートル。

なお、一枚目に、後から字を削ったと思われる傷がある。もとは「虚子先生」と記されていたのだろう。そこには、「虚×××とは別箇の立場から全然俳壇に独自の進境を求める事にし何者にも属せず合流せぬ事にしてゐる」とある。一九三九年の久女はすでに、虚子の序文を必要としていない。

この年、久女は内面に変化を来し、師高浜虚子と「ホトトギス」から訣別した。それは「国子の手紙」が「昭和十五年からはふつつりと来なくなつた」ことと符合するのは坂本が指摘するとおりである[14]。

末尾には途絶した書入れが見られる。本文とは異なる筆致から、後年読み返した際のものと思われる。あるいはこの時に一枚目の文字も削ったのだろうか。「虚」の字を残し、続く文字が容易に推測できるよう、しかしどうしても削り取らざるを得なかった久女の心境は推測するしかない。

（なかにし　ゆきこ　学芸員）

【注記】

(1)　北九州市立文学館図録「生きた、書いた、愛した　女性作

家の手紙展」(二〇〇九・四)。

(2) 前掲、かごしま近代文学館図録「杉田久女の俳句歳時記」。

(3) 池上不二子『俳句に魅せられた六人のをんな』(近藤書店、一九五七・二)、山口青邨「杉田久女のこと」(『杉田久女読本　俳句臨時増刊」角川書店、一九八二・九)など。

(4) 『杉田久女句集』(角川書店、一九五二・一〇)序文。

(5) 増田連『杉田久女ノート』(裏山書房、一九七八・四)。前掲、池上不二子『俳句に魅せられた六人のをんな』にも「久女さんの句集は最初『磯菜』と題してゐたやうだつたが……」との言及がある。

(6) 坂本宮尾『真実の久女―悲劇の天才俳人　1890―1946』(株式会社藤原書店、二〇一六・一〇)の「補章　新資料の発見から」中『磯菜』出版予定の記事――昭和十年の小冊子「現代俳句」。

(7) 坂本宮尾『杉田久女』(富士見書房、二〇〇三・五)。

(8) (6)に同じ。

(9) 高浜虚子の洋行は、一九三六年二月から六月にかけて。虚子は「墓に詣り度いと思つてをる」(「ホトトギス」一九四六・一一)で、門司港を出港、帰港した際の記憶として、久女の「手がつけられぬ」様子を記した。増田連は『杉田久女ノート』で、虚子が乗船した船の名前からこれを『箱根丸』事件」とし、その描写が誤りであることを検証、指摘している。

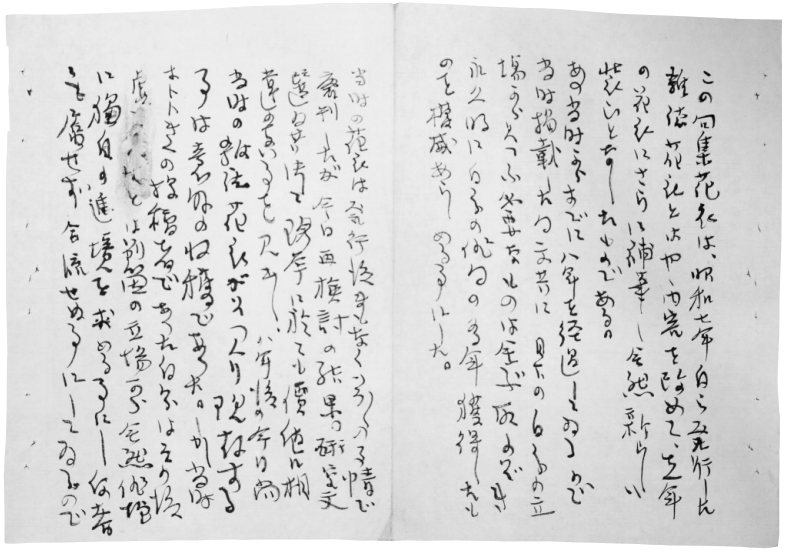
(10) 石昌子編『久女文集』(石一郎方、一九六八・二)解説。虚子は『杉田久女句集』の序文でこの遺句稿を直接見たが「全く句集の体を為さない、只乱雑に書き散らしたものであつた」としている。しかし、石昌子は自分が清記した原稿を虚子に渡し、原本は見せていないと後年明かしている(石昌子『杉田久女』株式会社東門書屋、一九八三・七)。久女の遺句稿は石昌子編『杉田久女遺墨〈続〉』(株式会社東門書屋、一九九二・九)で確認することができる。

(11) 前掲『真実の杉田久女』

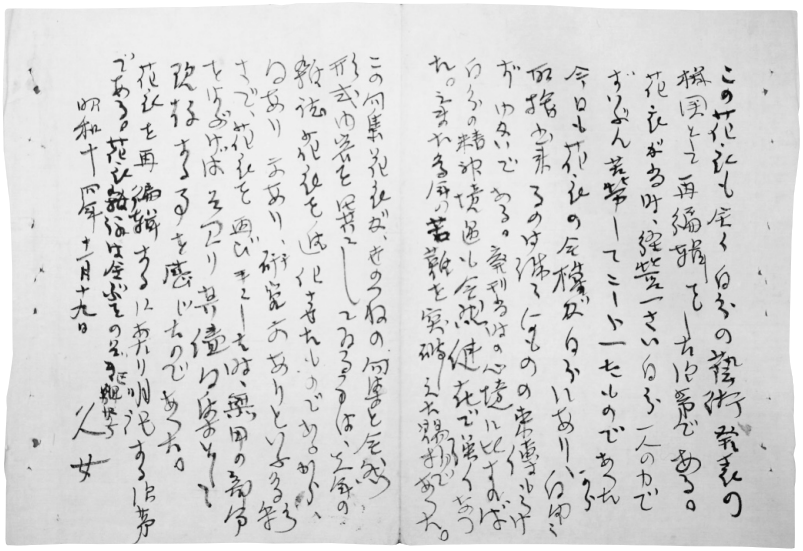
(12) 石昌子「久女記」(『杉田久女遺墨』株式会社東門書屋、一九八〇・四)

(13) 前掲『真実の杉田久女』

(14)



この句集花衣は、昭和七年自ら発行した
雑誌花衣とはやゝ内容を改めて、先年
の花衣にさらに補筆し全然新らしい
装ひとなしたものである。
あの当時からすでに八年を経過してゐるので
当時掲載した句文共に目下の自分の立
場から見てふ必要なものは全ぶ取のぞき
永久的に自分の俳句の多年獲得したも
のを権威あらしめる事にした。
当時の花衣は発行後まもなくいろ〳〵の事情で
廃刊したが今日再検討の結果。研究文
選句共決して現今に於ても価値に相
違のない事を見出し、八年後の今日尚
当時の雑誌花衣がそつくり現存する
事は意外の収穫であつた。しかし当時
ホトトギスの投稿者であつた自分はその後
虚×××（破損）とは別箇の立場から全然俳壇
に独自の進境を求める事にし何者
にも属せず合流せぬ事にしてゐるので



この花衣も全く自分の芸術発表の
機関として再編輯をした次第である。
花衣が当時、編纂一さい自分一人の力で
ずいぶん苦労してこしらへたものであつたから
今日も花衣の全権が自分にあり、自由に
取捨出来るのは誠に何ものの束縛もうけ
ずゆかいである。廃刊当時の心境に比すれば
自分の精神境遇も全然健在で強くなつ
た。之また多年の苦難を突破しえた賜物であつた。
この句集花衣が、世のつねの句集と全然
形式内容を異にしてゐる事は、先年の
雑誌花衣を進化させたものであるから、
句あり　文あり、研究文ありといふ多彩
さで、花衣を再び手にした時、無用の部分
をはぶけばそつくり其儘句集として
現存する事を感じたのであつた。
花衣を再編輯するにあたり明記する次第
である。【花衣雑誌は全ぶをのぞき（以下訂正跡）】

昭和十四年十一月十九日　　久女

児童文学の雑誌「小さい旗」
解題・総目次(2)第51号〜第82号

小野　恵

総目次を作成した前回(『北九州市立文学館紀要』第1号)に引き続き、「小さい旗」第51号(昭和53・3)から、昭和期最後の発行となった第82号(昭和63・12)までの総目次を作成した。

■概要

復刊第1号(通巻第18号)から季刊を目標とし、第51号以降も平均して年三回の発行が続く。主宰は水上平吉、編集委員は第50号から変わらず第62号(昭和56・11)まで、富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉の四名、第63号(昭和57・3)からは片山に代わり世良絹子が務めた。表紙を手がけた久冨正美は、同人作品の挿絵のほか、独自のイラスト作品を掲載した。

掲載ジャンルは、全274作品(イラスト、報告、紹介、来信、祝文、追悼、広告などをのぞく)のうち、童話や民話などの「創作」が150作品と半数以上を占める[1]。執筆者と掲載作品数は以下のとおり(括弧内は作品数)。田辺みゆき(17)、坂井ひろ子(14)、世良絹子、徳永和子(各12)、松本梨江(9)、方藤朋子(9)、甲木美帆(8)、富永敏治、木下一夫、下田麻紗子(各6)、松尾初美、渡辺フミヨ(各5)、黒瀬圭子、武田幸一、矢部協子(各3)、田中まきよ、くろさわるみこ(各2)。女性の同人が積極的に作品を発表している。

続いて、「詩」が55回の掲載(以下括弧内に、掲載回数と作品数を補足)と全体の二割を占める。みずかみかずよ(31回・207篇)、高瀬美代子(14回・24篇)、柏木恵美子(6回・22篇)の三名が作品を寄せた。その他、随筆、批評、翻訳、短歌も掲載。水上平吉は第67号(昭和58・8)で、第38号(昭和48・12)以来となる翻訳作品「羊飼いとボタンの花」を発表し、第82号までに同作を含む6作品を寄せた。頁数は、第50号までは最大48頁だったが、第51号から第67号までは、第59号の48頁を除き55頁前後、第68号から第82号までは、60〜70頁と増加。作品執筆者数は、各号平均7〜8名で、短篇作品の掲載が多い第67号は12名、第81号は13名、長篇作品掲載の第77号は2名、第79号は3名、みずかみかずよ追悼号の第82号は2名となっている。

さて、第60号(昭和56・2)には、第28号(昭和46・3)以来となる同人・協力会員名簿が掲載され、同人は51名、協力会員は33名[2]。同人数は十年間で20名近く増加している。元来、北九州在住者を中心に創刊された「小さい旗」だったが、51名のうち北九州在住の同人は13名、福岡市やその周辺の在住者が大半を占めた。主宰の水上は同人数の増加に喜びつつ、北九州の同人が少ないことに「はがゆさを感じている」(第55号あとがき)とも。

また、第60号掲載の「小さい旗の会について」によると、郵便料金の値上げ[3]をきっかけに全国的に同人誌の廃刊が相次いでいるが、「小さい旗」の場合は同人や協力会員の人数が大幅に増えたことで、「同人誌としては珍しいと思われる〝黒字〟の状態が続いて」いた。しかし、やはり運営面では苦労していることが書かれている。ちなみにこの時期の「小さい旗」の同人費は毎月500円だった[4]。このような厳しい状況のなかでも、作品の質の向上を目指し月一回の例会を開催、児童文学の講習や講演会にも積極的に参加するなどした[5]。

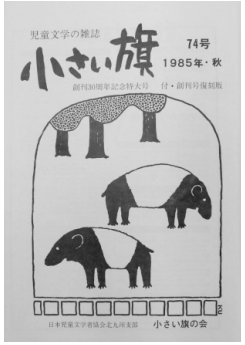
誌面では比江島重孝(宮崎県在住)が、第51号から第59号に前号の作品評を寄せた。また主宰の水上平吉は、巻頭の随筆「ふぐちょうちん」で、全国の児童文学の動向をはじめ、子どもの自殺、犯罪や非行、受験戦争など児童をとりまく社会問題などを取り上げた[6]。

> 常に新人を迎えながら、互いに学びあって、児童文学を文学として真髄に迫っていく気魄をもちたいものである。子ども向きだからといって甘っちょろく考えることなく、おとなにとっての真実は、子どもにとっても真実であるはずだし、単純明快なことを、いかに生き生きと描いていくかといったことではなかろうか。
>
> 第61号「ふぐちょうちん」

このように、「小さい旗」の同人は常に児童文学と真摯に向き合い創作活動を行っていた。

■創刊三十周年

一九八五（昭和60）年一一月、「小さい旗」は創刊三十周年を迎えた。主宰の水上は「この三十年はあえぎあえぎの歩み」で「基礎固めの時期だった」とし、「児童文学そのものが無限の可能性をもったジャンルであり、だれにでもひらかれた世界」であること、これからさらに「質的向上を図りたい」と決意を記した（第70号「ふぐちょうちん」）。第74号の「創刊30周年記念特大号」は、巻末に創刊号が復刻版として掲載され、全99頁の特大号となった。椋鳩十、那須正幹、あまんきみこなどの児童文学者たちから祝辞が寄せられ、当時日本児童文学者協会理事を務めていた児童文学者の関英雄は「若い書き手を育ててほしい」とこれからの「小さい旗」の課題も挙げた。なお、同号掲載の同人の書籍一覧によると、私家版を含む出版点数は１２１点にのぼっていた。



第74号「創刊30周年記念特大号」

■三人の追悼特集

第69号（昭和59・4）は、比江島重孝の追悼特集号。比江島は、宮崎県内の小学校教諭、校長を務めながら民話の研究を行った。「小さい旗」には第22号（昭和44・9）から参加、民話の再話や創作を中心に作品を寄せた。「小さい旗」の指導的立場の同人だった。山の分校シリーズ全六巻[7]がある。

右から第69号、第81号、第82号

第81号（昭和63・7）は児童文学者・椋鳩十の追悼特集。椋は「小さい旗」の前身でもある「火の国」に創刊から携わり、「小さい旗」を支えた。また、みずかみかずよの詩作について助言も行い、詩集『馬でかければ』（葦書房、昭和52・5）『みのむしの行進』（葦書房、昭和54・5）の序文も書いた。

第82号（昭和63・12）は、みずかみかずよ追悼号。34名が追悼文を寄せた。みずかみは、「詩特集」とうたわれた第76号（昭和61・7）では、「いのちみちる」というテーマで一気に39篇もの詩を発表している。また、第80号、第81号に「闘病日記」と題し全72首の短歌を投稿するなど、亡くなる数カ月前まで創作を続けた[8]。当時「第二期九州文学」などで活躍していた星加輝光はみずかみの詩について、「どれもいのちのほとばしり、いのちの饗宴」であり、「花を見、草木を見る心を、改めて教えられた」と評した。

■書籍出版

今回総目次を作成した昭和50年代～60年代にかけては、同人の書籍出版の隆盛期であり、「小さい旗」を拠点としながら作家・詩人として活躍する同人も現れた飛躍の時期ということができる。第62号（昭和56・11）によると、同人が出版した単行本は40冊を超えたと書かれている。水上は、「本になりさえすればよいというのではないが、広く読まれ、より厳しい目にふれることだけは事実であり、そこからまた新たな出発があるのだと思えば、やはり一つの段階として喜ばしい」（第55号「ふぐちょうちん」）と、書籍出版を最終目標としてではなくステップアップのための一つの手段として捉えていることがうかがわれる。

書籍出版に際しては、地方出版社の支えが大きかった。特に、葦書房（福岡市）[9]、石風社（福岡市）[10]、ひくまの出版（静岡県浜松市）[11]の三社は、出版協力および、「小さい旗」への広告掲載なども行い運営を支えた。また、偕成社、フレーベル館、理論社など東京の出版社から商業出版された作品も出た。

「小さい旗」掲載ののち書籍刊行された主な作品は以下のとおり（括弧内には掲載号数と出版社を補足）。比江島重孝「山の分校シリーズ」のうち『イノくんのいる分校』（第52号　太平出版社、昭和54・2）、方藤朋子『ひびけ！フルートのうた』（第43号の「フルートを吹くおじいさん」を改題　太平出版社、昭和54・6）、田辺みゆき『トヨおばあさんとネコのシマさん』（第59号　佑学社、昭和56・7）、徳永和子『いえなかったありがとう（絵本・語り継ぐ戦争）』（第53号　葦書房、昭和56・8）、坂井ひろ子『父さんと母さんの火』（第61号　偕成社、昭和57・5）、同『地の底の小鳥』（第73号　ひくまの出版、昭和60・11）、徳永和子『報道』（第72号　偕成社、昭和61・4）、坂井ひろ子『お

よし十七よめざかり』(第56号〜第58号「およしはよめご」を改題　岩崎書店、昭和62・9)など。

その他書籍に、門司秀子(作)・長野ヒデ子(絵)『とうさんとこえた海(絵本・語り継ぐ戦争)』(葦書房、昭和55・8)、みずかみかずよ『南の島の白い花』(葦書房、昭和55・8)、世良絹子『ダンプカーをおいかけろ』(フレーベル館、昭和55・9)、みずかみかずよ『みずかみかずよ少年詩集 こえがする』(理論社、昭和58・4)、同『ごめんねキューピー』(佑学社、昭和58・11)、みずかみかずよ(作)・長野ヒデ子(絵)『ぼくのねじはぼくがまく』(石風社、昭和61・11)、荻野泉『いつか飛ぶ日に』(偕成社、昭和62・9)、坂井ひろ子『走れ!車いすの犬「花子」』(偕成社、昭和62・12)などがある。

■同人たちの活躍

同人たちの活躍を、文学賞受賞、教科書掲載などから見てみる。比江島重孝は、一九七七(昭和52)年、宮崎県文化賞芸術部門受賞。同年、「山の村からついてきた花」で第一回石森延男児童文学奨励賞に選ばれるなどした。第2号から「小さい旗」に参加していた世良絹子は、小郡市に在住し地域の民話研究にも力を注いだ。『光の川』(ポプラ社、昭和51・1)で一九七六(昭和51)年度、第一回青少年文学賞佳作を受賞した。松本梨江は「らっしゃい」で、第二回(昭和56)絵本とおはなし新人賞(童話部門)推奨作品賞を受賞。坂井ひろ子は『走れ!車いすの犬「花子」』(偕成社、昭和62・12)で第三五回(昭和63)サンケイ児童出版文化賞の推薦作品に選ばれた。松尾初美は「お客さんはネコ」で第五回(昭和60)「わが子におくる創作童話」優秀賞、また「春の日草原で——」で、第五回(昭和63)アンデルセンのメルヘン大賞の優秀賞を受賞した。

また、みずかみかずよの詩が小学校国語の教科書に掲載された。「あかいカーテン」が光村図書の『こくご二上　たんぽぽ』に採用(昭和55年度〜60年度)されたのを皮切りに、「ふきのとう」(『新編　新しい国語　二下』東京書籍、昭和61年度〜平成3年度)、「金のストロー」(『新編　新しい国語　三上』東京書籍、昭和61年度〜平成7年度)と続いた。一九八一(昭和56)年一一月には、水上平吉、みずかみかずよが、児童文学の分野で地域文化の向上に寄与した努力と業績を評価

され、夫婦で北九州市民文化賞を受賞した[12]。

(おの　めぐみ　学芸員)

「北九州市立文学館紀要」第1号に掲載した「小さい旗」解題には、以下の誤りがございます。訂正してお詫びいたします。

34頁　【誤】「火の鳥」→【正】「火の国」
36頁　【誤】『おさげのパオチュン』→【正】『おさげのパオチェン』

【注記】

(1) 第51号から第82号までのジャンル別作品数は、創作150作品(55%)、詩55回・253篇(20%)、随筆46作品(17%)、批評15作品(5%)、翻訳6作品(2%)、短歌2回・72首(1%)。

(2) 退会済であっても、「これまでの協力に感謝する意味をこめて」掲載すると書かれ、正確な人数ではない。

(3) 創刊時の一九五五(昭和30)年の郵便料金は、葉書5円、封書10円だったが、その後昭和期に段階的に四度の値上げが行われ、一九八一(昭和56)年の値上げでは葉書30円、封書60円となった。

(4) 第60号掲載の「小さい旗の会について」によると、創刊時の同人費は100円だったのではないかとしているが不明。復刊前の第17号までは200円で運営されていた。

(5) 誌面で告知・報告されている主なものは以下のとおり。①一九七九(昭和54)年五月二七日、福岡市立婦人会館にて「国際児童年記念・児童文学の話と朗読のつどい」開催。児童文学者の安藤美紀夫の講演、みずかみかずよによる詩集『みのむしの行進』の朗読。②一九八〇(昭和55)年一月〜三月、北九州、福岡、久留米で「子どもの本の学校」開催。十月二五日には戸畑出身の児童文学者・神沢利子が「私と児童文学」と題し講演。③一九八一(昭和56)年一月〜三月、福岡市、久留米市で「子どもの本の学校」開催。安藤美紀夫、神沢利子などが講演。

(6) 「ふぐちょうちん」は第68号のみ休載。

(7) 「山の分校シリーズ」は、①『イノくんのいる分校』②『サンショウウオ探検隊』③『父ちゃんからきたはがき』④『てんぐさんござるか』⑤『カラス先生のじゅぎょう』⑥『さようならのおくりもの』の全六巻。

(8) みずかみかずよは、一九八六(昭和61)年一一月、石風社から『童話集　ぼくのねじはぼくがまく』、『詩集　小さな窓から』、『詩とエッセイ集　子どもにもらった詩のこころ』の三冊を同時出版、一九八八(昭和63)年九月には「闘病日記」をまとめた『歌集　生かされて』を出版した。

(9) 葦書房は、一九七〇(昭和45)年創業の福岡市の出版社。二〇一二(平成24)年以降、有限会社から個人事業として運

営。「小さい旗」第55号〜第78号、第80号に広告を出した。

(10) 図書出版石風社は一九八一（昭和56）年創業の福岡市の出版社。第77号〜79号、第81号、第82号に広告を出した。

(11) ひくまの出版は一九七八（昭和53）年〜二〇一四（平成26）年まで、静岡県浜松市にあった児童書籍の出版社。第74号〜第82号に広告を出した。

(12) 一二月一三日に祝う会が行われた。児童文学者の椋鳩十、たかしよいち、那須正幹など児童文学作家たちも参加した。

【凡例】

掲載するのは、「小さい旗」（二号まで「小さな旗」）全一四四号（二〇一八年一二月発行）のうち、第五一号（一九七八年三月発行）から第八二号（一九八八年一二月発行）までの細目である。

一、各号の見出しは奥付に従い、巻号、発行年月日、編集委員、発行所を記した。また、表紙に記載されている表記は号数のあと（ ）内に補った。〈例　第五一号（1978年・春）〉

一、各項目の記述は、ジャンル・表題・執筆者名（または画家名）・ページの順に記載し、各表題ごとに改行した。記載に当たっては本文にある表記を優先し作成した。ジャンル名は編者が付した。ただし、あとがき、執筆者住所、同人・協力会員名簿などはジャンル名を付けず ― とした。

一、細目は底本の目次に掲載がない項目も含め、配列は本文のページ順とした。底本にノンブルが記載されていない場合は、便宜上編者がノンブルを付した。

一、執筆者の表記に関しては、次のような処理を行なった。

(1)イニシャルで表記され執筆者が明らかな場合は、（ ）内に執筆者名を補った。〈例　Q→Q（久冨正美）〉

(2)執筆者については、執筆者住所、同人・協力会員名簿、寄贈図書・雑誌一覧、広告等、作品以外の項目は ― とした。

一、明らかな誤記・誤植と判断されるものは訂正した。

「小さい旗」総目次（2）第五一号〜第八二号

第五一号（1978年・春）

昭和五三年三月二六日

富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉赤ちゃんは母乳で育てて　水上平吉　1

創作　ほこほこまんじゅう　くださいな　渡辺フミヨ　2

創作　銀色の星　田辺みゆき　8

紹介　寄贈雑誌「九州童話」六五号ほか二一冊）　―　11

創作　もう一つの誓い　徳永和子　12

紹介「私の勧める児童図書」（西日本新聞から）　高橋さやか、水上平吉、高良竹美　21

イラスト〈絵のページ〉月夜の船　久冨正美　22

創作　ヴァイオリン　加来和江　24

詩　ぬくみ／かべの蝶／季節の風／ひとつのり　んご／今日と明日のあいだ　みずかみかずよ　32

創作〈人形劇〉モグラの穴が・・・・　京都志朗　34

創作　カラス部隊北上せよ　木下一夫　39

報告　第二回同人詩創作研究会報告　富永敏治　45

批評　執念の作品『夕焼日記』（要旨）　菊地正　45

紹介　寄贈図書（武田幸一『つりがね山は大さ　わぎ』ほか二〇冊）　―　51

紹介　少年詩集『馬でかければ』　意外な好評に驚き　―　52

批評　九州の児童文学史に金字塔　比江島重孝　54

―　あとがき　水上平吉　55

広告「小さい旗」同人の本（みずかみかずよ　『少年詩集馬でかければ』ほか）　―　裏表紙

第五二号（1978年・夏）

昭和五三年六月二五日

富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉児童文学と賞　水上平吉　1

創作　イノくんのいる学校　比江島重孝　2

創作　水色のサングラス　松本梨江　28

イラスト〈絵のページ〉忘れられたハシゴ　久冨正美　30

詩　ひな人形はかざらない／ケヤキ並木の駅　まえは／うまれたばかり／つぼみ／火花　となって／あなたが大将／白い花の咲く　ころは　みずかみかずよ　32

創作　クリスマスのチビ　田辺みゆき　35

紹介「私の勧める児童図書」（西日本新聞から）　みずかみかずよ　42
紹介 寄贈雑誌（「山彦」五号ほか一六冊）　―　42
創作 やまんばの木　甲木美帆　43
―　執筆者住所（八名）　―　47
創作 へそをとられたてっちゃん　下田雅子　48
創作 黒い目のノウサギ　世良絹子　49
批評 児童文学のむずかしさを痛感　比江島重孝　51
紹介 寄贈図書（松谷みよ子『まちんと』ほか四〇冊）　―　52
―　あとがき　水上平吉　53
広告「小さい旗」同人の本（門司秀子『おばあさんの童話』ほか）　―　裏表紙

第五三号（1978年・冬）

昭和五三年一一月二六日

富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉子どもの自殺と文化状況　水上平吉　1
創作 ばばしゃん　さかいひろこ　2
創作 言えなかった ありがとう　徳永和子　10
紹介「私の勧める児童図書」（西日本新聞から）　みずかみかずよ　15
創作 おなかがすいて…　松本梨江　16
詩 やみよ／ひょうたん／きんもくせい／かぜのふくひ／白鳥座／夕顔／豆を煮る　みずかみかずよ　18
紹介 寄贈雑誌（「童研」一九号ほか三八冊）　―　20
創作 浜辺の歌　方藤朋子　21
創作 復活祭に　矢部協子　29
―　執筆者住所（七名）　―　33
イラスト〈絵のページ〉おみやげはなーに？　久冨正美　35
投稿〈児童の詩〉四季／おんぼろ駅　守口研一（佐賀市北川副小四年）　36
創作 山のまんなかにおいでよ　世良絹子　37
批評 五二号評　作者の秘めた文学的愛情を　比江島重孝　53
紹介 寄贈図書（中村弘『ばけもんじる』ほか八〇冊）　―　54
―　あとがき　水上平吉　55
広告「小さい旗」同人の本（門司秀子『おばあさんの童話』ほか）　―　裏表紙

第五四号（1979年・早春）

昭和五四年二月二五日

富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉しかられて…　水上平吉　1
創作 アローは盲導犬　田辺みゆき　2
紹介「私の勧める児童図書」（西日本新聞から）　みずかみかずよ　45
紹介 寄贈雑誌（「親子読書」一二月号～三月号ほか二三冊）　―　45
―　執筆者住所（六名）　―　45
イラスト〈絵のページ〉夜のオーケストラ　久冨正美　46
詩 福寿草／うたう　みずかみかずよ　48
創作 ともだちスヨン君　とみながとしはる　49
創作 もんぐり むんぐり おばあさん　渡辺フミヨ　50
批評 五三号評　文学の虚構をどう構築するか？　比江島重孝　52
紹介 寄贈図書（竹下文子『星とトランペット』ほか一〇六冊）　―　53
―　あとがき　水上平吉　55
紹介 滝沢哲也作曲・みずかみかずよ詩「愛のはじまり」楽譜　―　裏表紙

第五五号（1979年・初夏）

昭和五四年五月二七日

富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉「イノくんのいる分校」と「みのむしの行進」と「ひびけ！フルートのうた」　水上平吉　1
創作 美しい時よ（連載第一回）　世良絹子　2
イラスト〈絵のページ〉いつまで泳ぐか鯉のぼり　久冨正美　18
創作 猫すて山　甲木美帆　20
紹介 最近の児童文学受賞作品　―　28
創作 源さん　徳永和子　29
創作 野菊の群れ　加来和江　37
詩 道／しずかな誓い／白い風がふけば／宝石売りの来た日　みずかみかずよ　41
創作 まっかなてぶくろ　下田雅子　43
創作 ピーポとないたネコ　松尾初美　45
創作 おかしの木　山蔦八重　48
批評 五四号評　文学形象のきびしさを求めて　比江島重孝　50
報告 各地にたくさんの旗がある　日本児童文

学者協会支部代表者会議に出席して　久冨正美　51
紹介「私の勧める児童図書」（西日本新聞から）　みずかみかずよ　54
紹介　寄贈図書・雑誌（はまみつを『春よこい』、「きつね火」一三号ほか六八冊）　―　54
―　執筆者住所（一〇名）　―　55
投稿〈児童の詩〉世界にただ一つ　水上あらた（尾倉小六年）　55
―　あとがき　水上平吉　56
紹介　滝沢哲也作曲、みずかみかずよ詩「福寿草」楽譜　―　57
広告　葦書房　―　裏表紙

第五六号（1979年・秋）

昭和五四年九月九日

富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉晩学のすすめ　水上平吉　1
創作　カニュウバンはビルマの花　木下一夫　2
創作　キャンプファイヤーをしたそう太　甲木美帆　20
創作　ゆうこちゃんのはる　方藤朋子　8
創作　みっつめはなぁに　田中まきよ　13
―　執筆者住所（一〇名）　―　16
創作　サクラの下でワン　ニャン　チュウ　田辺みゆき　17
創作　ウミハ　スバラシイヨ　松本梨江　20
報告　盛会だった「児童文学の話と朗読のつどい」　水上平吉　21
イラスト〈絵のページ〉クリスマスの夜　久冨正美　22
詩　かなかなのうた／夏のおわりに／蝶のいる木／夾竹桃／まなざし／メロン　みずかみかずよ　24
創作　およしはよめご(2)　さかいひろこ　27
紹介　受贈雑誌（「たむたむ」二七号、二九号ほか二三冊）　―　34
創作　美しい時よ（最終回）　世良絹子　35
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉（那須正幹『おばあさんなんでも相談室』ほか六一冊）　―　47
批評　五六号評　文学にはなぞが必要である　比江島重孝　49
報告　新たなる意欲を　同人の児童書合同出版記念会の報告　水上平吉　50
紹介　寄贈雑誌（「九州童話」六七号ほか二五冊）　―　21
イラスト〈絵のページ〉ブランココぎたいな　久冨正美　22
詩　夏へのさそい／びわの木／朝風のなかで／木かげ／夏休みのページ／かいがら草／白い道／白いキャンバス　みずかみかずよ　24
創作　みどりぼうしのおじいさん　田辺みゆき　28
創作　およしはよめご(1)　さかいひろこ　35
創作　美しい時よ（連載第二回）　世良絹子　38
批評　五五号評　燃焼のきびしさと美しさ　比江島重孝　55
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉（比江島重孝『宮崎の伝説』ほか四二冊）　―　56
広告　葦書房　―　裏表紙

第五七号（1979年・冬）

昭和五四年一二月二〇日

富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉孤独との戦い　水上平吉　1
創作　白いソックス　徳永和子　2
紹介　北九州・久留米・福岡の三市で子どもの本の学校を開催　―　53
―　あとがき　水上平吉　53
広告　葦書房　―　裏表紙

第五八号（1980年・春）

昭和五五年四月二七日

富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉ああ宮崎康平さん　水上平吉　1
創作　とうさん　あついラーメンを　松本梨江　2
紹介　受贈雑誌（「親子読書」一～五ほか三三冊）　―　17
―　小さい旗の会について　―　17
イラスト〈絵のページ〉影もフクロウ　久冨正美　18
創作　芽を出せ　アコ　徳永和子　20
創作　およしはよめご(3)　さかいひろこ　35
詩　ひよのきた朝／寒梅／少年―ある肖像画より―／みなもとへかえる／海／まなざし／祭りの夜／めばえ／誕生　みずかみかずよ　49
批評　五七号評　行きて帰りしの物語　比江島重孝　55
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉（まど・みちお『風

景詩集』ほか七六冊）　—　56
広告　葦書房　—　裏表紙

第五九号（1980年・秋）
昭和五五年九月二一日
富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉読んでほしい戦争児童文学　水上平吉　1
創作　父親参観日のあいつ　さかいひろこ　2
詩　あじさい／ビワの実／ひなげしの咲く日／わかれ／つりがね草／ポプラの海で　みずかみかずよ　13
創作　風の王さま　木下一夫　17
イラスト〈絵のページ〉（無題）　久冨正美　22
創作　トヨおばあさんとネコのシマさん　田辺みゆき　24
創作　白いごはん　加来和江　35
紹介　第六期北九州子どもの本の学校ご案内　—　45
報告　私の語りつぐ戦争　児童文学夏のゼミナール〈第五回・広島〉に参加して　みずかみかずよ　46
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉阿南哲朗（『よるの動物園第二集』、「芸神」一二号ほか九五冊）　—　48
広告　葦書房　—　裏表紙

第六〇号（1981年・春）
昭和五六年二月一五日
富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

紹介「小さい旗」同人の本　見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉絵本「とうさんかあさん」　水上平吉　2
創作　写真　さかいひろこ　3
詩　ボタ山の唄　とみながとしはる　17
イラスト〈絵のページ〉どちらへゆくの　久冨正美　18
創作　サンタクロースはだれ　方藤朋子　20
紹介　受贈雑誌（「中部児童文学」四二号ほか四〇冊）　—　31
詩　ほんとうのことがいえない／燃える樹　みずかみかずよ　32
創作　雲の子供　甲木美帆　34
創作　コスモスの花の向こうに　下田麻紗子　36
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉（五味太郎のコッチピピピピ』ほか九五冊）　—　52
—　あとがき　水上平吉　54
紹介　小さい旗の会について　—　55
—　同人・協力会員名簿（八一名）　—　56
広告　葦書房　—　裏表紙

第六一号（1981年・夏）
昭和五六年六月二八日
富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

紹介「小さい旗」同人の本　見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉新たな一歩を　水上平吉　2
創作　父さんと母さんの火　さかいひろこ　3
イラスト〈絵のページ〉鉄橋渡るとき……　久冨正美　18
創作　星がみてたよ　うば車　田辺みゆき　20
詩　腕ずもう　高瀬美代子　29
創作　クロッコとんだ　世良絹子　30
創作　ちび、しょげ、でかはどうなるか　松尾初美　35
詩　にゃんともいえぬ／寒梅／お嫁入りした　ぼたん／ケヤキ／つばき／チューリップの芽／フジ　みずかみかずよ　38
創作　オレと狸と母さんと　田中まきよ　41
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉（五味太郎『なんだかうれしくなってきた』、「九州童話」七〇号ほか一一九冊）　—　52
紹介　きり絵はがき「つるのおんがえし」（津田栄子）が童画グランプリ入選　—　53
—　あとがき　水上平吉　55
—　同人・協力会員名簿（八四名）　—　56
広告　葦書房　—　裏表紙

第六二号（1981年・初冬）
昭和五六年一一月二九日
富永敏治、片山英一郎、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

紹介「小さい旗」同人の本　見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉北九州市民文化賞をいただきました　水上平吉　2
創作　赤い帽子の小鳥　徳永和子　3
創作　あした天気にしておくれ　柿原智子　7
詩　秋風／おかあさん　高瀬美代子　11
創作　天地創造と盤古　木下一夫　12

イラスト〈絵のページ〉おいしいかげ　久冨正美　18
詩　硫黄山のしりぃ煙　白石嘉四郎　20
創作〈私の朝鮮童話（その一）〉すずらんの咲くころ　とみながとしはる　22
創作〈私の朝鮮童話（その二）〉アメ売りおじいさんと二人の少年　とみながとしはる　23
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（たなべみゆき『トヨおばあさんとネコのシマさん』ほか二二冊）　―　25
詩　ひょうたん／ゆれうごくもの／さなぎ／ゆめみる木　みずかみかずよ　26
創作 新人記者　さかいひろこ　28
来信 心を育てていただいた　清水スミ子（宮崎市）　43
投稿 母の日　清水勝美（宮崎市恒久小五年）　44
創作 ひろしと子犬　野路丘菊堂　45
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（岩崎京子『久留米がすりのうた』、「子どもの本棚」ほか一一八冊）　―　25
報告 成長のための一里塚　合同出版記念・祝賀会の報告(4)　Q（久冨正美）　50
―　執筆者の住所（一二名）ほか　―　52
紹介 福岡と久留米で子どもの本の学校　―　53
―　あとがき　水上平吉　53
広告 葦書房　―　裏表紙

第六三号（1982年・春）
昭和五七年三月一四日
富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉ミニコミの力　水上平吉　1
創作 さくら貝のうろこ　下田麻紗子　2
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（浜野卓也『新美南吉の世界』ほか九冊）　―　14
創作 編み物いたします　松本梨江　15
詩　友に　高瀬美代子　17
イラスト〈絵のページ〉みつけたぞ大きな日時計　久冨正美　18
創作 ネコの兄弟　ミケとクロ　田辺みゆき　20
詩　初恋　高瀬美代子　29
創作 やきもちおごるぞ　徳永和子　30
詩　足音／ふきのとう／梅林／雪の夜　みずかみかずよ　33
創作 さようならナナ　甲木美帆　35
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（川崎洋子『しかられた神さま』、「青い星」一五号ほか七〇冊）　―　49
報告 さらにがんばって　北九州市民文化賞を祝う　草地勉　51
広告 葦書房　―　裏表紙

第六四号（1982年・夏）
昭和五七年六月二七日
富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉みんな一生懸命　水上平吉　1
創作 孫七　ボルネオ島漂流物語（その一）　世良絹子　2
詩　白もくれん／おだまきの花／たんぽぽ／シクラメン／スイトピー／だれでしょう／わらび／たけのこ／ねこやなぎ　みずかみかずよ　19
イラスト〈絵のページ〉夏の朝・窓　久冨正美　22
創作 トドロマツ　白石広子　24
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（高橋睦郎『オデュッセイア物語』ほか一五冊）　―　28
創作 クロネコ通信　松尾初美　29
詩　初恋　高瀬美代子　34
創作 母さん鳥の夢　甲木美帆　35
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（佐藤さとる『とおいほしから』、「未来樹」二七号ほか三六冊）　―　38
創作 アイラブ　ブラウン・アイラブ　レモン　田辺みゆき　39
創作 おばあさんが　びょうきです　黒瀬圭子　49
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（坂井ひろ子『父さんと母さんの火』ほか四三冊）　―　52
広告 葦書房　―　裏表紙

第六五号（1982年・秋）
昭和五七年一一月一日
富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉ある児童文学講座　水上平吉　1
創作 孫七　ボルネオ島漂流物語（その二）　世良絹子　2
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（岡信子『パジャマでおでかけ』ほか三〇冊）　―　19
詩　屋根のうた／打上げ花火／線香花火／能舞台　みずかみかずよ　20

イラスト〈絵のページ〉忘れもの　久冨正美　23
創作　ぼくがサラダをきらいな理由　加藤やす子　24
詩　みのむし／とけいのチョキチョキ／やなぎ　宮田京子　30
創作　隣のチヨばあちゃん　松本梨江　32
創作　小鳥のトムのおくりもの　田辺みゆき　39
創作　ほほえみ　矢部協子　48
報告　和やかに励まし合って　「父さんと母さんの火」出版記念会　甲木美帆　50
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（『柏木恵美子詩集』、「文芸四季」創刊号ほか一〇〇冊）　—　51
追悼　須藤克三氏の死を悼む　水上平吉　53
—　あとがき　水上平吉　53
広告　葦書房　—　裏表紙

第六六号（1983年・春）

昭和五八年二月二〇日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
随筆〈ふぐちょうちん〉ああ　岡上ツリヱさん　水上平吉　1
創作　孫七　ボルネオ島漂流物語（最終回）[5]　世良絹子　2
詩　とべたらば／息子をおもうて　みずかみかずよ　20
イラスト〈絵のページ〉月夜の池　久冨正美　22
創作　月見草の咲く庭　くろさわるみこ　24
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（木村裕一『にげだしたおやつ』ほか一八冊）　—　28
創作　空いろのかさ　松本梨江　29
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（神沢利子『あかいそりにのったウーフ』、「みみずく」四号ほか三一冊）　—　28
創作　ある日ののんのん動物園　とつぜんみんな消えたよ　木下一夫　35
創作　そらいろのゾウ　方藤朋子　39
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（香山美子『一年生はおにいさん』ほか九冊）　—　42
創作　わたあめだーいすき　下田麻紗子　43
報告　やさしさにつつまれて　盛会だった門司ご夫妻を祝う会　松尾初美　49
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（馬場のぼる『まあすけのなわとび』、「中部児童文学」四七号ほか二七冊）　—　50
—　あとがき　水上平吉　51
広告　葦書房　—　裏表紙

第六七号（1983年・初秋）

昭和五八年八月二八日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
随筆〈ふぐちょうちん〉心を写すということ　水上平吉　1
詩　旅びとと馬っこ／てがみ　岡田武雄　2
詩　おおばこ／ひるがお／ほんとかな　みずかみかずよ　3
詩　セントポーリア／手紙／あじさい／道／公園／樹　柏木恵美子　4
紹介　新刊紹介〈受贈誌〉（「回転木馬」七号ほか四〇冊）　—　5
詩　ないしょのはなし／詩（うた）　高瀬美代子　6
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉Ⅰ（池田夏子『かんごふさん』ほか一二冊）　—　6
イラスト〈きりえ〉きゅうり　片渕洋祐　7
創作〈立絵芝居〉すりと悪魔と青い花　京都志朗　8
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉Ⅱ（武田幸一『おばけポコポコ』ほか二六冊）　—　17
イラスト〈絵のページ〉かげのつなわたり　久冨正美　18
創作　アリランとうげをこえて（一「記念の千円銀貨」）　坂井ひろ子　20
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉Ⅲ（五味太郎『たまごをどうぞ』ほか五冊）　—　31
創作　わんすけ　音楽会へ　田辺みゆき　32
創作　ばあちゃんのたらい　わたなべふみよ　37
創作　なしの皮パーティー　柿原智子　40
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉Ⅳ（伊勢英子『あかちゃんなんかすててきて』ほか一四冊）　—　43
創作　とべ　竹とんぼ　荻野泉　44
随筆　まほうのたね　甲木美帆　51
翻訳〈中国・トンシアン族の民話〉羊飼いとボタンの花　柯楊（採話）、水上平吉（訳）　54
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉Ⅴ（さねとうあきら『おこんじょうるり』ほか三七冊）　—　57
広告　葦書房　—　裏表紙

第六八号（1983年・冬）

昭和五八年一二月一一日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
イラスト〈きりえ〉おとなにしないでください　片渕洋祐　1
創作　白いなす　黒瀬圭子　2
創作　フライをたべたのはだれですか　世良絹子　5
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉Ⅰ（寺村輝夫『ピンチ博士の大ぼうけん』ほか一二冊）　—　10
創作　がまんできなかったんだ　松本梨江　11
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉Ⅱ（山口恵美子『風待村の銀ぎつね』ほか一五冊）　—　16
創作　首輪をつけた野犬　徳永和子　17
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉Ⅲ（岩崎京子『少女たちの明治維新』ほか七冊）　—　25
イラスト〈絵のページ〉かげのいろいろ　久冨正美　26
詩　ごまだらカミキリ／あり／が／ごきぶり　みずかみかずよ　28
創作　アリランとうげをこえて（二「二次試験」）　坂井ひろ子　30
創作　英彦山天狗と権佐虫（ごんざむし）　木下一夫　41
詩　もじ／生きる／ナイフ　柏木恵美子　52
翻訳〈中国の児童文学〉いのち草　巴金（作）、水上平吉（訳）　54
紹介　新刊紹介〈受贈図書〉Ⅲ（蟇川内満『童話と教育と私』ほか四三冊）　—　63
—　あとがき　水上平吉　63
広告　葦書房　—　裏表紙

第六九号（1984年・春）
比江島重孝氏追悼特集
昭和五九年四月一日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
随筆〈ふぐちょうちん〉21世紀に生きる児童像を　水上平吉　1
創作〈人形芝居〉猫じゃ猫じゃとおっしゃいますが　京都志朗　2
創作　今夜は満開　田辺みゆき　9
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（あまんきみこ『もうひとつの空』、「九州童話」七四号ほか四八冊）　—　19
詩　おっぱいあかちゃん／のびる／おふろだいすき／うんちあかちゃん　みずかみかずよ　20
イラスト〈絵のページ〉月夜の森で　久冨正美　22

創作　せんせいも一ねんせい　方藤朋子　24
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（川村たかし『投げろ魔球！カッパ怪投手』ほか八冊）　—　25
詩　干しだいこん／みかん／あこがれ　高瀬美代子　26
随筆〈アメリカの学校で学んだこと・考えたこと〉シーサイド小学校1　くろさわるみこ　27
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉（森下真理『ぼくも恐竜』ほか八冊）　—　29
創作　アリランとうげをこえて（三「オモニの道をしっていますか」）　坂井ひろ子　30
—　比江島重孝氏年譜　—　40
追悼〈弔辞〉心に残る教えやお話　日高美香（生目小学校児童代表）　40
追悼〈弔辞〉「民話は土俗と格調を」　高橋政秋（宮崎県民話研究会会員）　41
追悼〈弔辞〉民話聴く子らの目輝く　黒木利弘（生目小学校教頭）　41
追悼　比江島さんとの30年　世良絹子　44
追悼　出会い、そして別れに　岩切祐子　45
追悼「文学に年齢はない」　田中まきよ　46
追悼　比江島先生とわたし　みずかみかずよ　46
追悼　夢よ　日向の空へ　方藤朋子　47
追悼　ええ、きばりますとも　坂井ひろ子　48
追悼「あれは　いけますよ」　渡辺フミヨ　49
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（安房直子『冬吉と熊のものがたり』ほか一五冊）　—　49
創作〈遺稿〉春の海　比江島重孝　50
来信　おたより二通（高鶴光江から水上平吉・かずよ、東則男からみずかみかずよ）　—　58
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅴ（黒瀬圭子『白いなす』ほか一二冊）　—　58
イラスト〈きりえ〉勉強しなさい　片渕洋祐　60
—　あとがき　水上平吉　61
広告　葦書房　—　裏表紙

第七〇号（1984年・夏）
昭和五九年七月二二日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
随筆〈ふぐちょうちん〉夢はでっかく…　水上平吉　1
創作　飢人地蔵の笛の音　荻野泉　2
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（鶴見正

夫『サーカスのぞう』、「みみずく」六号ほか三二冊）　―　18
詩　雨あがり／ノンちゃんの話　朝のみち／雨のみち／「幼稚園にきたおばけ」という絵をかいた日／たおれたプラタナス／あせ　みずかみかずよ　19
詩　存在　高瀬美代子　20
詩　クスを見に／クレーン　柏木恵美子　21
イラスト〈絵のページ〉月夜の森で　久冨正美　22
創作　イタチイタチ　うちのにわにおいでよ　わたなべふみよ　24
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（那須正幹『こちら妖怪クラブ』ほか一〇冊）　―　29
創作　あお木くん　あのね　方藤朋子　30
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（椋鳩十『片耳の大シカ』ほか一九冊）　―　31・39
随筆〈アメリカの学校で学んだこと・考えたこと〉シーサイド小学校2　くろさわるみこ　32
創作　くたばれ　ちいにいちゃん　徳永和子　35
来信　今から第一歩、よろしく　大野紘子　39
創作　アリランとうげをこえて（四・終回「半島切羽」）　坂井ひろ子　40
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（竹下文子『星占師のいた街』ほか四冊）　―　59
翻訳〈中国・トン族の民話〉長い長い髪の娘　肖甘牛、藩平元（再話）、水上平吉（訳）　60
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅴ（戸川幸夫『王者のとりで』ほか一二冊）　―　65
広告　葦書房　―　裏表紙

第七一号（1984年・冬）

昭和五九年一一月二五日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉「夕鶴」と紙塑（しそ）人形と　水上平吉　1
創作　ネネココ日記　田辺みゆき　2
追悼　点滴の合間片手に「小さい旗」　和田義雄さんを悼む　水上平吉　25
イラスト〈絵のページ〉かげのてんらんかい　久冨正美　26
詩　〈秋から冬へのコンサート〉コスモス／ふゆじたく／しじみちょう／つわぶきのはな／ムラサキシキブ／いちょう　みずかみかずよ　27

創作　海ほおずき　武田幸一　30
創作　すすき野の風　武田幸一　32
創作　正月三日の夜　武田幸一　34
詩　ゆびきり／青いみかん／別れの日　高瀬美代子　36
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（こむらさとる『クマさんの消えた日』ほか二二冊）　―　37
創作　たぬきの糸車　方藤朋子　38
創作　ポコポコゆきうさぎ　柏木恵美子　40
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（田辺みゆき『そらおせ！おやねこ子ねこ』ほか二二冊）　―　44
随筆〈アメリカの学校で学んだこと・考えたこと〉シーサイド小学校3　くろさわるみこ　45
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（今泉吉晴『がんばれひめねずみ』ほか八冊）　―　47
創作　朝のハイウエー　富永敏治　48
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（さとうまきこ『ふしぎなパーティー屋さん』、「おりおん」三号ほか五一冊）　―　55
来信　おたより（星加輝光ほか）　―　56
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅴ（宮川ひろ『おとうさんのおんぶ』ほか二二冊）　―　57
―　あとがき　水上平吉　57
紹介　福岡子どもの本の学校（ご案内）　―　57
広告　葦書房　―　裏表紙

第七二号（1985年・春）

昭和六〇年四月二八日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉関英雄氏の「同人雑誌考」に感激　水上平吉　1
創作　報道　徳永和子　2
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（井上優子『大人も子供もあるもんか―私的絵本論』、「季節風」二号ほか三九冊）　―　12
詩　ふきのとう／クロッカス／紅椿　高瀬美代子　13
イラスト〈絵のページ〉無題　久冨正美　14
創作　ゆきがふる／さよならさんかく／こまるくん／チョコレートはどんなあじ／春のきず　方藤朋子　16
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（しかたしん『はしれカヌー、冒険の海へ！』ほか七冊）　―　18

紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（那須正幹『六年目のクラス会』ほか一二冊） — 20
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（木村裕一『どうぶつニュースのじかんです』ほか六冊） — 23
詩 〈早春のファンファーレ〉フキノトオ／ウメ／ジンチョウゲ／フクジュソウ／野焼き／啓蟄 みずかみかずよ 24
創作 かわいいいのち 矢部協子 26
随筆〈アメリカの学校で学んだこと・考えたこと〉シーサイド小学校4 くろさわるみこ 30
創作 角がとれたよ 甲木美帆 33
創作 大浦のうらしまたろう わたなべふみよ 39
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅴ（長崎源之助『きみはポパイになれるか』ほか一一冊） — 41
翻訳〈中国・ダフール族の民話〉親ゆびぼうや 雪鷹（再話）、水上平吉（訳） 42
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅵ（とくだきよ『くらやみのキジムナー』ほか一五冊） — 44
投稿 三十九年前をどう語りますか 豊田珠美（大洲北中学校三年） 45
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅶ（坂井ひろ子『ばばしゃん』ほか一九冊） — 46
来信 おたより（椎窓猛ほか） — 47
投稿「おさげのパオチェン」を読んで 井上芳枝 47
報告 激励されてバラの笑顔 松尾・渡辺両氏の祝賀会(6) 田辺みゆき 48
紹介 和田義雄さんの豆本に敬意 水上平吉 50
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅷ（鶴見正夫『とべさいごのトキ』ほか一五冊） — 50
— あとがき 水上平吉 51
広告 葦書房 — 裏表紙

第七三号（1985年・夏）

昭和六〇年七月二一日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉ともに〝旗〟をかかげる喜び 水上平吉 1
創作 ゆうれいの名は七 世良絹子 2
詩 かくれんぼ 高瀬美代子 24
報告 なごやかに出版記念祝賀会(7) 坂井ひろ子 24
イラスト〈絵のページ〉もうすぐ仲なおり 久冨正美 26

創作 地の底の小鳥 坂井ひろ子 28
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（大石真『かいじゅうランドセルゴン』ほか三八冊） — 40
創作 わすれないぜローラ 田辺みゆき 41
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（浜たかや『宇宙人の地球日記』ほか二七冊） — 59
翻訳〈中国・チーヌオ族の民話〉さかなむすめ 陳平、趙玉琳（再話）、水上平吉（訳） 60
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（竹田まゆみ『プレゼントはお父さん』ほか四冊） — 63
来信 おたより（長野ヒデ子ほか） — 64
— あとがき 水上平吉 65
広告 葦書房 — 裏表紙

第七四号（1985年・秋）

創刊30周年記念特大号付・創刊号復刻版

昭和六〇年一一月一〇日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

広告 ひくまの出版 — 見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉創刊30周年を迎えて 水上平吉 2
祝文「小さい旗」の方々へ 椋鳩十 3
祝文 思いやりの心を大切に 目加田誠 3
祝文 たいまつの火を燃やし続けよう 渡辺誠毅 4
祝文 大きな前進を 藤田圭雄 5
祝文 若い書き手を育ててほしい 関英雄 6
祝文 実験の場として 川村たかし 7
祝文 批評しあった思い出 那須正幹 8
祝文 これからのご活躍に期待 安藤美紀夫 9
祝文 三十年前のことなど 岩崎京子 10
祝文 星雲状の熱気が… 星加輝光 11
祝文 九州の児童文学の歴史 武田幸一 12
祝文 作品を問う、となると 高橋さやか 13
祝文 いよいよ壮年期 あまんきみこ 15
日記 日記抄―「小さい旗」胎動のころ 富永敏治 15
紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（はゆかまさのり『竜になる』ほか四冊） — 16
— 年表「小さい旗」30年のあしあと 水上平吉 17
— 同人の本 — 24
詩 〈小さな窓から〉ひかり／窓の外へ／いのち／よろこび／たとえば……／今日から起きます／手術台／目ざめ／抜糸／見舞い／退院の朝 みずかみかずよ 28

創作〈人形劇〉恐怖のマジック・ショウ　京都志朗　31
創作　ヤコちゃん　くろさわるみこ　34
創作　ぼく、友達ほしいねん　黒瀬圭子　38
創作　冬至にはゆず湯をどうぞ　下田麻紗子　43
随筆〈アメリカの学校で学んだこと・考えたこと〉シーサイド小学校５　くろさわるみこ　51
イラスト〈絵のページ〉バクのおやつ　久冨正美　54
創作　広造じいさん、お金が大好き　甲木美帆　56
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（糸川京子『電話番まかせてよ！』ほか四冊）　―　67
詩　ゆめ　高瀬美代子　68
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（あまんきみこ『こんにちはのこちゃん』ほか一一冊）　―　68
―　（付録）「小さな旗」第一号　復刻版　―　69
来信　おたより（椎窓猛ほか）　―　97
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（門司秀子『星をみがくおばあさん』ほか五五冊）　―　98
―　あとがき　水上平吉　99
広告　葦書房　―　裏表紙

第七五号（１９８６年・春）

昭和六一年四月二七日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

広告　ひくまの出版　―　見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉花のいのち　水上平吉　2
創作　どっかでみたことあるような　徳永和子　3
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（和田登『ねこにもよろしくね』ほか一九冊）　―　28
来信　おたより（星加輝光ほか）　―　29
イラスト〈絵のページ〉かげのじゃいけん　久冨正美　30
詩　〈小さな庭の花たちに〉おそ咲きの朝顔／夕顔／ホトトギス／秋冥菊（シュウメイギク）／わた／とうがらし／イエライシャン／ハイビスカス／さるすべり／おちば　みずかみかずよ　32
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（藤本四郎『きかんしゃピッポ』ほか一五冊）　―　37
創作　子犬と角を曲がったら　田辺みゆき　38
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（角野栄子『くまくんのあくび』ほか一一冊）　―　53
創作　ちょっとだけ春　柳田庸子　54
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（薫くみこ『きらめきの十二歳』ほか五一冊）　―　57
随筆〈アメリカの学校で学んだこと・考えたこと〉シーサイド小学校６　くろさわるみこ　58
詩　詩黄水仙／シクラメン　高瀬美代子　61
―　あとがき　水上平吉　61
広告　葦書房　―　裏表紙

第七六号（１９８６年・夏）

昭和六一年七月二七日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

広告　ひくまの出版　―　見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉はがきつうしん２００号　水上平吉　2
詩　〈いのちみちる〉いのちみちる／新芽／春１／春２／しだれ柳／若葉ケヤキ／ケヤキ並木／ミヤコワスレのつぼみ／食べる／パンジー／バラは咲くよ／わたげのタンポポ／ハマナス／かたばみ／スイートピー／ツバメズイセンのつぼみ／ツバメズイセンの花／竹の子／芽ぶき／柿の花／柿の根／はりえんじゅ／牡丹の花ひらく／ふうりんそう／花大根／大きな木がほしい／クスの新芽　みずかみかずよ　3
イラスト〈絵のページ〉日時計あそび　久冨正美　18
批評〈詩評〉教科書にのった「金のストロー」　井上優子　20
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（舟崎克彦『なんにもせんにん』ほか三三冊）　―　21
創作　ぐるんと　ひともどり　松本梨江　22
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（松谷みよ子『鯨小学校―おじいさんの話』ほか三三冊）　―　29
創作　フクレロ　フクレロ　ケッケッケッ　松尾初美　30
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（長野博一『なにをみてきたの？』ほか二六冊）　―　32
詩　朝／あじさい　高瀬美代子　33
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（川崎洋『トシオの船』ほか一六冊）　―　33
報告　にぎやかにお祝いと激励　徳永和子作『報道』出版記念会　世良絹子　34
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅴ（香山美子『まちのパンやさん』ほか二一冊）　―　36
来信　おたより（あまんきみこほか）　―　37

詩　〈いのちみちる　その2〉くちなし1／くちなし2／どくだみ／めのまんねんぐさ／てっぽうゆり／かのこゆり／てっせん／ゆきのした／すいれんのある池／すいれん／とけいそう／あじさい　みずかみかずよ　44　38
広告　石風社　―
―　あとがき　水上平吉　45
広告　葦書房　―　裏表紙

第七七号（1986年・秋）

昭和六一年一〇月一二日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

広告　ひくまの出版　―　見返し
随筆　〈ふぐちょうちん〉「いのちの輝きを！」水上平吉　2
創作　羽ばたけ空へ　荻野泉　3
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（立原えりか『ユウイチさんの人形』ほか四冊）　―　54
詩　森のにおいをもつ少女／にがうり／綿／野性にもどったあさがお　みずかみかずよ　55
イラスト〈絵のページ〉かげふみ　久冨正美　58
批評〈詩評〉新境地をみせた〝みずかみ詩〟―　柏木恵美子　60
七六号・詩特集を読んで　柏木恵美子　60
紹介　新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ（大石真『そらをとんだトンコ』ほか二四冊）　―　61
来信　おたより（椋鳩十ほか）　―　62
紹介　講演と朗読のつどい、懇親パーティー　―　63
紹介　新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ（藤真知子『ふしぎなくにのまじょ子』ほか三九冊）　―　64
広告　石風社　―　64
―　あとがき　水上平吉　65
広告　葦書房　―　裏表紙

第七八号（1987年・春）

昭和六二年三月一五日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

広告　ひくまの出版　―　見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉花ざかりの女たち　水上平吉　2
随筆〈アメリカの学校で学んだこと・考えたこと〉シーサイド小学校番外編「マリンダ・ベケット」　くろさわるみこ　3
紹介　新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ（まつおやすこ『子ねこのしずかが家出した』ほか一四冊）　―　6
創作　ぼくのお金がチャロン　田辺みゆき　7
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（二俣英五郎『だれかこねこをたすけて』ほか一四冊）　―　12
創作　いじめっコウタはあまえっコウタ　坂井ひろ子　13
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（「文芸四季」五号ほか四三冊）　―　17
詩　〈鳥たちのうた〉セキレイ／ヒヨ／信号機とシジュウカラ／カワラヒワ　柏木恵美子　18
随筆　素晴らしい歌を学校と子どもに　椋鳩十　20
批評　教科書にのった詩　その二「あかいカーテン」　井上優子　21
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（岡田ゆたか『おいしいラーメンてんこうせい』ほか七冊）　―　22
詩　祝婚歌　1～6　みずかみかずよ　23
イラスト〈絵のページ〉かげもわたるよ　久冨正美　26
創作「なにげなく」はやさしい響きで　下田麻紗子　28
翻訳〈中国の児童文学〉ゾウの怒り　劉厚明（作）、水上平吉（訳）　57
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅴ（田中康隆『飛べ！ぼくのマンタ』ほか二三冊）　―　60
来信　おたより（まど・みちおほか）　―　61
報告　日本児童文学者協会創立40周年・「小さい旗」創刊30周年記念「講演と朗読のつどい」と「懇親パーティー」大盛会に身がひきしまる　水上平吉　62
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅵ（徳永和子『デートのあいては名探偵』ほか三九冊）　―　64
広告　石風社　―　65
広告　葦書房　―　裏表紙

第七九号（1987年・秋）

昭和六二年一〇月四日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

広告　ひくまの出版　―　見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉頑張る女　水上平吉　2
創作　たったひとりの課外授業―京子の体験留学　倉掛はるみ　3
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（宮川ひろ『馬小屋のコマーシャル』ほか二三冊）　―　55
詩　〈鳥たちのうた2〉コゲラ／カイツブリ二

羽／とまどうカイツブリ　柏木恵美子　56
イラスト〈絵のページ〉どこへいったかしら？　久冨正美　58
詩　〈旅　横浜の一日〉横浜の外人墓地／港
山下公園／横浜のおじいさん／人形の館
みずかみかずよ　60
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（小嶋雄二『もう一度六年生』ほか一四冊）　—　63
来信　おたより（星加輝光ほか）　—　63
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（藤井旭『チロと星空』ほか一二三冊）　—　64
広告　石風社　—　裏表紙

第八〇号（1988年・初春）
昭和六三年一月一七日
富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
広告　ひくまの出版　—　見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉ああ　椋鳩十さん　水上平吉　2
創作〈劇〉南の島の白い花
みずかみかずよ（原作）、本馬恭子（脚色）　3
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（徳永和子『ルパンの赤いジャンパー』ほか四二冊）　—　16
創作　ザボンのにおいがとんでくる　世良絹子　17
創作　ジャスト！　徳永和子　23
創作〈童謡〉どんぐりのうた　西田春作　27
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（荻野泉『いつか飛ぶ日に』ほか一五冊）　—　27
短歌〈闘病日記より〉痛み／母の心／花／これから
みずかみかずよ　28
イラスト〈絵のページ〉冬の日　夏の日　久冨正美　30
随筆〈私のアメリカ生活から〉枯葉　くろさわるみこ　32
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（安間繁樹『やまねこカナの冒険』ほか二七冊）　—　35
随筆　島田先生の思い出　柏木恵美子　36
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（神沢利子『けちんぼおおかみ』ほか二〇冊）　—　39
批評　教科書にのった詩3「ふきのとう」　井上優子　40
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅴ（やすいすえこ『ピアノをひくのはだれ？』ほか一四冊）　—　41
批評『小さな窓から』1「よろこび」　井上優子　42
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅵ（坂井ひろ子『走れ！車いすの犬「花子」』ほか一七冊）　—　43
創作〈紙芝居〉アヤカのはなし　富永敏治　44

創作　やさしい心でおねがいします　松尾初美　48
追悼　自由と野性の人　椋鳩十さんをしのぶ
小林慎也　50
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅶ（川村たかし『星の見える家』ほか五冊）　—　51
—　執筆者住所（一二名）　—　51
来信　おたより（目加田誠ほか）　—　52
—　あとがき　水上平吉　53
広告　葦書房　—　裏表紙

第八一号（1988年・夏）椋鳩十さん追悼
昭和六三年七月一〇日
富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
広告　ひくまの出版　—　見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉若々しかった椋鳩十先生　水上平吉　2
追悼　ホラ貝を高らかに吹き鳴らせ！　たかしよいち　3
追悼　椋先生と私のこと　世良絹子　6
追悼　生きるよろこびを教えられて　みずかみかずよ　7
追悼　椋鳩十さんからのおたより　水上平吉（編集）　9
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（長崎源之助『たこたこあがれ』ほか二三冊）　—　11
紹介　夏の児童文学・文化講座「児童文学サマースクールin東京」ほか　—　11
創作　ムベの木とおじいさん　古賀なな　12
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（伊藤真智子『もうすぐみんな一年生』ほか一六冊）　—　17
創作　わにはんこ　方藤朋子　18
創作　ごはんのたきかた　富永敏治　34
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（篠原良隆『わくわくおとまりえんそく』ほか八冊）　—　35
詩　〈朝倉の水車〉五月になると／いちばんに／三連水車／七連そろって　柏木恵美子　36
イラスト〈絵のページ〉せいくらべ　久冨正美　38
創作　ライオンのライライ　田辺みゆき　40
創作　しあわせって、なに？　下田麻紗子　48
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（阪田寛夫『てんとうむし』ほか五五冊）　—　55
創作　エニシダの花　渡辺実穂　56
創作　ぼくの母の日　しんきみこ　61
報告　新春飛翔！荻野泉さん『いつか飛ぶ日に』出版記念祝賀会　倉掛はるみ　63
紹介　夏の児童文学・文化講座「朝日保育セミ

ナー」　―　64
随筆　文と人間―みずかみかずよ　高橋さやか　65
短歌〈闘病日記　そのⅡ〉ベッドの上／窓の外／娘／花／　みずかみかずよ　68
随筆〈私のアメリカ生活から〉ルービンシュタインのように　くろさわるみこ　70
―　執筆者住所（一五名）　―　73
随筆　詩は楽しい　みずかみかずよ　74
随筆　詩に生きるみずかみかずよ　水上平吉　74
―　あとがき　水上平吉　75
広告　石風社　―　裏表紙

第八二号（1988年・冬）みずかみかずよ追悼号

昭和六三年一二月二五日

富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

広告　ひくまの出版　―見返し
随筆〈ふぐちょうちん〉月下美人の花のように　水上平吉　3
詩　〈遺稿詩〉いまのぼく／生きている／たんぽぽ／みつけたよ／おやすみ／おてつだい／歩こうよ　みずかみかずよ　4
追悼　水上かずよさんの闘病の記録　小南達矢　8
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ（戸川幸夫『ゴリラの山に生きる』ほか一三冊）　―　10
追悼　評すべき言葉を知らぬ　目加田誠　11
追悼　サルビアの昇天　畑島喜久生　12
追悼　追憶片々　渡辺誠毅　13
追悼「ポプラの海で」から…　矢田部宏　14
追悼　かずよさんとみずよさん　那須正幹　15
追悼　あたたかく　明るく　さわやか　岩崎京子　16
追悼　供華の一輪　松永伍一　18
追悼　椋鳩十が励ました人　久保田みと子　19
追悼　美しいかずよざくらを　山花郁子　20
追悼　ありがとうを　神沢利子　21
追悼　詩塊のひと　与田準一　22
追悼　信じられないことばかり　杉みき子　22
追悼　かずよさん　横浜の一日　長崎源之助　23
追悼　詩塊は永遠に　関英雄　25
追悼　じゃあ　またね　山下夕美子　26
追悼　ほほえみ一つ　飯田栄彦　27
追悼　純粋に輝いた生命の灯　小林慎也　28
追悼　時を超え、空間を超えて　松谷みよ子　29
追悼　詩の朗読に聞きほれ文通　浅見静代　30
追悼　フライパンほめて友情深める　長野ヒデ子　31
追悼　くしゃみサンタさまへ　徳永和子　32
イラスト〈絵のページ〉春の日時計／夏・まってくれ！／秋・かげは忘れもの／冬・さあ、いそげ　久冨正美　34
詩　おはなしだいすき／かみなり／ごっこあそび／なわとび／メダカ／あきのやま／どんぐりごま／このゆびとまれ／ゆりのうた　みずかみかずよ　38
追悼　いつまでも生き生きと　いのちのうたよ　高橋さやか　40
追悼　お酒をあがって新しい世界を　門司秀子　41
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ（柏葉幸子『とび丸竜の案内人』ほか五冊）　―　41
追悼「あかとんぼ」での大きな声と笑い　西きよみ　42
追悼　一通の手紙より　倉掛はるみ　43
追悼　書き残された作品の数々　世良絹子　44
追悼　悲しみを埋めるために　柏木恵美子　45
追悼　白い花　京都志朗　46
追悼　シンデレラになった多世さん　大坪富美子　47
追悼　アルプスへの誘いもむなしく　中川節子　48
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ（椋鳩十『感動は心の扉をひらく』ほか一冊）　―　49
追悼〈詩〉かがり火　高瀬美代子　50
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ（宮川ひろ『しあわせ色の小さなステージ』ほか一二冊）　―　50
追悼　思い出すままに　あまんきみこ　51
追悼　童顔の詩人を偲んで　たかしよいち　52
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅴ（中沢晶子『あしたは晴れた空の下で　ぼくたちのチエルノブイリ』）　―　53
追悼　かずよ草のこと　久冨正美　54
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅵ（加藤多一『風生まれる』ほか二冊）　―　54
批評　こおろぎのうた　井上優子　55
―　年譜　みずかみかずよの足跡　水上平吉（編）　58
―　弔電抄録　―　60
来信　小学生からのおたより（一〇名）『きんのストロー』を読んで　―　62
紹介　新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅶ（安藤美紀夫『いじめっ子やめた』ほか八五冊）　―　63
―　あとがき　水上平吉　65
広告　石風社　―　裏表紙

【注記】

(1) 連作第一回「おっかさん」掲載。

(2) 連作第二回「黒い手」、第三回「あずき、しょきしょきしょき」、第四回「むかごめし」、第五回「かくし畑」をまとめて掲載。

(3) 連作第六回「杉の下草刈り」、第七回「山ん神参り」、第八回「野ぼたん」、第九回「野に立つ煙」、第一〇回「雨ごいおどり」を掲載。

(4) 長野ヒデ子『とうさんかあさん』、たなべみゆき『トヨおばあさんとネコのシマさん』、徳永和子『いえなかったありがとう』の出版および、松本梨江が『らっしゃい』で「絵本とおはなし新人賞（童話部門）」推奨作品賞を受賞した祝賀会。

(5) 作品の文末に作者による「韓泊をたずねて」掲載。

(6) 松尾初美の第五回「わが子におくる創作童話」の優秀賞受賞（受賞作品は「お客さんはネコ」）、渡辺フミヨ『もんぐりむんぐりよねばあさん』出版の合同祝賀会。

(7) 田中まきよ『木の十字架』、井上優子『大人も子供もあるもんか』合同出版祝賀会。

【付記】

本総目次作成にあたり、第五二号、第五五号については粟谷さやか氏所蔵の雑誌をお借りして作成しました。ご協力に心よりお礼申し上げます。

寄贈資料　二〇一七（平成29）年度

■仰木実、辻奥茂資料ほか　二三八点（色紙、短冊、雑誌、冊子）

寄贈者　吉良タツヱ
受入月　二〇一七年四月

仰木実と辻奥茂はともに北九州で活動した歌人。仰木も辻奥も八幡製鐵所に勤めながら創作活動を行った。仰木は戦後、一九五〇（昭和25）年に歌誌「波動」を創刊。五三年には、浦橋七郎と歌誌「群炎」を創刊した。歌集に『風紋の章』『流民のうた』がある。辻奥は六八年、会誌「向日葵」を創刊。歌集に『高炉の月』『長き冬』がある。

二人の直筆の短歌作品のほか、印刷物「会報北九州歌人」（一九六六～八〇年　10冊）も当時の北九州歌壇の動向を伝える。

■杉田久女使用の机　二点

寄贈者　宮川民子
受入月　二〇一七年四月

大正時代から昭和の初期、北九州・小倉で女性俳人の先駆けとして活躍した杉田久女が使用した文机。木製、折り畳み式。縦三九×横一〇六×高さ三九センチメートル。

久女が指導した俳句会「白菊会」の会員であった村上壽美子氏に贈られ、村上氏から寄贈者へ託された。村上氏は久女の遺した書画等を集めて刊行された石昌子編『杉田久女遺墨』（株式会社東門書屋　一九八〇・四）にも所蔵の直筆資料を多数提供している。

■向野楠葉資料　四三二点（書軸、色紙、短冊、書簡、自筆資料、印刷物、写真、遺品類、雑誌、図書）

寄贈者　向野利彦
受入月　二〇一七年五月

向野楠葉は昭和期に北九州で活動した俳人。はじめ、八幡製鐵病院に医師として勤務しながら、「ホトトギス」系の俳人・皆吉爽雨に師事した。軍医として応召中に第一句集『柳絮』を出版。戦後、折尾（北九州市八幡西区）に眼科医院を開業し、創作活動を行った。句集に『遠賀野』『先島』など。

今回の資料には、向野の直筆が多くあるほか、高浜虚子や野見山朱鳥の掛け軸、親交のあった画家・平野遼からのはがきなども含まれている。また、向野が山鹿桃郊から主宰を引き継いだ俳誌「木の実」の復刊創刊号も現存僅少な貴重資料である。

■みずかみかずよ資料　二点（書簡、遺品類）

寄贈者　陽田周吾
受入月　二〇一七年一一月

北九州市出身の児童文学者・みずかみかずよの資料。書簡は陽田周吾氏宛（一九八七年一〇月二〇日消印）。みずかみが亡くなる一年前に寄せられたもの。もう一点は、みずかみの詩「花開く」を直筆でデザインしたオリジナルテレホンカード。

■森鷗外旧居ドールハウス

寄贈者　浪越裕美
受入月　二〇一七年一一月

北九州市小倉北区鍛冶町にある森鷗外旧居のドールハウス。佐脇紀子氏制作。木製、縦八〇・五×横八五・五×高さ三五センチメートル（ケース寸法）。佐脇氏の母方の実家・宇佐美家が、かつてこの家を所有していた。鷗外の「小倉日記」には家主・宇佐美房輝が登場する。ドールハウスは現在、旧居で展示中。

鷗外は、陸軍第十二師団軍医部長として小倉に赴任した一八九九（明治32）年六月から翌年十二月までこの家に住んだ。鷗外小倉三部作のうち小説「鶏」の舞台にもなっている。

森鷗外旧居は、一九七四（昭和49）年に北九州市の史跡に指定され、八二年から一般公開されている。

■杉田久女書簡　一点

寄贈者　飯田正隆
受入月　二〇一八年二月

ゆかりの俳人・杉田久女直筆のはがき。高柳御奥様宛（一九三七年一月一五日消印）。「高柳御奥様」については不詳。簡単な日程調整の内容だが、久女が俳誌「ホトトギス」の同人を削除されて間もない時期のもの。

森鷗外旧居ドールハウス
（屋根を外したところ）

■毛利雨一樓（ういちろう）歌稿ほか　一二点（歌稿、図書）

寄贈者　奥野明美
受入月　二〇一八年三月

毛利雨一樓は大正時代に北九州・戸畑へ転居し、若山牧水の「創作」に加入、師事した。三苫守西・京子夫妻とともに創作八幡戸畑支社の中心として、師牧水の来訪時は自宅で歓待するなどした。のち、戸畑図書館の建設を提案するなど、地域文化の進展にも尽力した。歌集に『ものかける』がある。

歌稿は縦一三六・三×横三四・四センチメートル。一九二八（昭和3）年、主基斎田（すきさいでん）の御田植えを詠んだ短歌「背振山にゐる白雲はさやかなる光ふくめり今日の佳き日を」が記されている。

新天皇が即位後に初めて行う新嘗祭を特に大嘗祭といい、大嘗祭で供えられる米を作る田は斎田と呼ばれる。斎田は悠紀（ゆき）の地方と主基の地方からそれぞれ選ばれる。昭和天皇の即位では、福岡県が主基の地方となり、福岡市早良区脇山に斎田が選ばれた。

北九州市立文学館紀要　第２号
平成31年３月31日　発行

編集・発行　北九州市立文学館
北九州市小倉北区城内４番１号
電話　093-571-1505

製　　作　株式会社ゼンリンプリンテックス

※凡例については、各論考に記しました。
※現在では適切でない表現の見られる資料があります。当時の社会状況を理解するため、そのままとしました。御理解の上、御了承ください。
※本内容の無断複製、転載等の行為を禁じます。

1809157A